



いのちの川

第5号(2014年12月)

<http://nssk.org/province/genpatsugroup/> (ホームページは日本聖公会管区事務所の諸委員会からリンク)

鹿児島川内原発再稼働に関する 「地元同意」に対する抗議声明

鹿児島県議会と鹿児島県知事は、川内(せんだい)原子力発電所の再稼働を受け入れるという決定を行いました。東京電力の福島第一原子力発電所の災害が、まだ解決の目処すら付いていないのに、今度は鹿児島で原発を再稼働するというのです。しかもかなり危険な地域であると専門家たちは指摘しています。日本聖公会正義と平和委員会と原発と放射能に関する特別問題プロジェクトは連名で、以下のような抗議文を送付しました。

<抗議文>

鹿児島県知事伊藤祐一郎殿
鹿児島県議会議員各位

去る11月7日、鹿児島県議会は川内原子力発電所再稼働賛成の陳情を可決し、伊藤祐一郎知事も再稼働に同意を表明いたしました。私たちは、その報道を信じられないうい思いで聞きました。国内外で、これだけ原発・放射能の危険性が指摘されているなかで、県民のいのちと生活を守るべき代表者たちが、原発再稼働に同意するということは、経済優先、人命軽視の誹りを免れません。

皆さんは、2011年3月の福島第一原子力発電所の爆発、放射能の拡散被害によって、多くの人々が住み慣れた故郷を奪われ、今尚、避難生活を余儀なくされている現実が続いていることをご存じだと思えます。また、今尚、大量の放射能物質が流出し、海や空や大地を汚染している現実をご承知だと思えます。また、未だに処理技術が確立されていないため、除染され集積された放射能汚染物質が各地に山積みになっている現実をご承知だと思えます。多くの人々に、このような危険を与えている原発の問題を知らながら、なぜ、今、原発を稼働させ、人々を危険にさらさなければならぬのでしょうか。

しかも、鹿児島県のいちき串木野市はじめ周辺自治体では、再稼働反対・廃炉決議などもなされていると聞いています。更に、日本火山学会では、11月3日、巨大噴火の予測が可能であることを前提にした原子力規制委員会の火山影響評価ガイドの見直しを提言しています。伊藤知事は、九州電力の説明に基づき火山リスクは問題ないと言明していますが、火山学会は、火山の専門家による科学的知見とかけ離れたものであると批判しています。

このような数々の問題が指摘されているなかで、原発再稼働に舵を切ることが、民意を踏みにじり、安全性を無視し、住民のいのちを守るという職務を放棄した行為であると言わざるを得ません。

私たち日本聖公会では、2012年5月に行われた定期総会において、「原発のない世界を求めて」という声明を採択しました。その主旨は、神様が与えた生きとし生けるものすべてのいのちを脅かしてはならないということです。いのちを危険にさらす可能性の高い原発の存在を許容してきたこれまでの歴史を反省し、今こそ原発を撤廃し、より安全な代替エネルギーを開発するようエネルギー政策の転換を提言しています。このことは、私たちキリスト者だけでなく、多くの国民の願いでもあると信じます。

私たちは、このような立場に立ち、このたびの鹿児島県知事及び県議会の決定に対して抗議を行うとともに、県民のいのちを最優先とする政策を行うよう強く求めるものであります。

2014年11月10日

日本聖公会正義と平和委員会

委員長 主教 洪澤一郎

日本聖公会原発と放射能に関する特別問題
プロジェクト 運営委員長 司祭 野村潔

郵便振替口座 00120-0-78536

口座名 日本聖公会

「原発問題プロジェクトのため」と明記して下さい。

支援チームから ～感謝とご報告～

皆様のお祈りとご支援に支えられて、リフレッシュプログラムを実施することが出来ました。長崎県高島での家族キャンプ、岐阜県郡上八幡町での小中学生キャンプ、毎年はるばる米子より駆けつけてくれる歌のお兄さん（ロケットくれよん）、おかげさまで子どもたちにたくさんの笑顔が戻ってきました。子どもたちや保護者に限りない活力が与えられています。このことが実証されてきたせいかわりを重ねるごとに、プログラム参加者が増えています。また多少自己負担が大きくなっても福島から離れた場所に人気があるようです。参加した子どもたちは目を輝かせて楽しかった、来年も行きたいを連発し、うれしい報告を聞きます。

今年は初めての試みとして、沖縄教区から10月から11月にかけての10日間、郡山セントポール幼稚園に保育士さんを派遣して頂きました。日々の保育で疲れ切っている先生たちの支援をして貰うためです。保育支援だけでなく、遠い沖縄の方々が自分たちのことをいつも心にとめてくれていること、それが保育の応援という形になったことが、郡山という地で保育をする先生たちへの何よりの応援になりました。

震災から間もなく4年になろうとしています。仮設に住む人々の生活は厳しさが増しています。余力がある方は仮設を出て新しい生活を始めています。残された多くの方々は狭い仮設で4年目のお正月を迎えます。国が声高に叫んだ福島の再建なくして日本の復興はあり得ないと迷言を吐いた多くの政治家がいましたが、現実の復興は遅れに遅れているのを感じています。もはや原発問題は人権問題です。人が普通に生きる権利を奪われています。花を植えたい、畑で野菜を育てたい、猫を飼いたい、孫を呼びたい、こどもを思い切り外で遊ばせたい…当たり前の日常に手が届かないのです。

まだまだ先は見えて来ませんが、これからも皆様に覚えられ、祈られ、ご支援をいただきながら一歩前に進みたいと願っています。どうぞ、日本の未来を担う子どもたちに元気な力を与えて下さいますように、今後ご支援を賜りますようお願いいたします。

（原発問題プロジェクト運営委員 司祭 越山健蔵）



～あの時のまま、「時」は止められています～
（富岡町2014年6月）

リフレッシュプログラム (2014年7月～11月)

～放射能を心配することなく、思いきり自然を感じます～



聖テモテ幼稚園・遠足



セントポール幼稚園・遠足



聖テモテ幼稚園
ロケットくれよんコンサート



小名浜聖テモテ教会SS遠足



泉玉露仮設ほっこりカフェの仲間



小名浜夏祭り



南の島で魚釣り(長崎県高島)



郡上八幡で思いきり水遊び



沖縄教区からの保育士さんと

原発と放射線に関する特別問題プロジェクト

いっしょに歩こうプロジェクトの活動方針と 2012 年日本聖公会総会決議「原発のない世界を求めて」に基づいて立てられた委員会です。

運営委員：司祭野村潔（長） 司祭岩城聰 司祭越山健蔵 司祭相澤牧人 司祭笹森田鶴 宮脇博子

事務局長：池住圭

福島県郡山市麓山 2-9-23 電話 0249-53-5987 fax050-3411-7085

信仰の課題としての原発・放射能問題 ～日韓聖公会宣教協働30周年記念大会から～

司祭 野村潔

去る10月20日から23日まで、韓国の済州島において、日韓両聖公会の全主教をはじめ両国代表約90名が参加して、「日韓聖公会宣教協働30周年記念大会」が開催されました。

この大会は、1984年に始められた日韓両聖公会の公式交流を記念して、10年ごとに内容的な振り返りを行い、これからの10年において取り組むべき課題と展望を共有するために行われているものです。大会では、基調講演やパネル・ディスカッションなどと共に、両聖公会が取り組んでいる活動に関する報告がなされました。そのひとつとして「原発と放射能に関する特別問題プロジェクト」の池住圭事務局長が、映像を交えて福島及び各地での活動報告を

行うと共に、原発・放射能をめぐる課題の深刻さについて話されました。

3泊4日にわたり様々な協議と交流が行われ、大会最後には、共同声明が採択され、11項目について今後の取組が決議されました。その9番目として原発・放射能に関する問題が取り上げられ、「両聖公会は、世界聖公会の『宣教の5指標 (The Five Marks of Mission)』を共有し、そのひとつである『創造秩序の保存と地球生命の回復と維持』のため、原発と放射能（核エネルギー）問題の深刻さを認識し、信仰の課題として取り組む」という内容が決議されました。これによって、両国聖公会は、少なくとも今後10年にわたり、相互の課題として、原発・放射能問題に取り組むことになりました。

(原発と放射能に関する特別問題プロジェクト
運営委員長・中部教区司祭)

しゃくなげ (時局コラム)

「仮設住宅を訪ねて」

福島原発事故から3年9カ月。第一原発から9キロにある浪江町は、帰還困難区域と居住制限区域が多くを占めており、故郷に帰りたく願いつつ避難生活を続けてきた多くの住民の心を少しずつ帰還断念に傾けさせている。国の除染完了時期の3年間延長や、よその土地への移住選択も賠償するという方針があるようだ。

去る11月17日、原発と放射能に関する特別問題プロジェクトのメンバーは、浪江町から福島市内のM仮設住宅に避難しておられる4人の方からお話を伺うことができた。私が受け取ったメッセージを書かせていただく。「みんなに1億円ぐらいの賠償をしてほしい」と言われるMさんは、地元で手広く建設資材を扱う仕事をしておられた。多くの資材をそのままにして町を出て来られ、仕事を継げない喪失感や、突然に断ち切られた無念さが、1億円ぐらいの賠償をという言葉から伝わってくる。Nさんは元左官屋さん。最近、そろそろ仮設を出てこっちに住み、便利屋をしようと思っておられる。「仕事があったら何でも紹介してください」との言葉に強い決意が感じられる。「お金をもらって遊んでいると思われるのは嫌だ」とも。仮設の仲間と一緒にいたいと自宅ではなく仮設に住み続けておられるNさんが、別れ際に立ち話風に言われた。「結局ずっと、ここで住むことになると思う」。そのニュアンスは、ここで一生を終わることを覚悟しておられるようで、胸が痛くなった。(eirene)